

育成すべき資質・能力とは

白梅学園大学

無藤 隆

本日の内容

1. 学力の三要素
2. 「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会・論点整理」に対応して幼児期に育成すべきこと
3. 資質・能力としての学力の構造イメージ
4. 育成すべき資質・能力の育成への提案
5. 育成すべき資質・能力の提案のイメージ
6. 情意の育ちと教育
7. メタ認知あるいは自覚化の教育
8. 対話と足場掛けと文化への参加

1. 学力の三要素

学校教育法第三十条 2 前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

1) 知識・技能、2) 思考力・判断力・表現力等、3) 主体的に学習に取り組む態度、そのバランスのある学力育成が求められる。

3

2. 「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会・論点整理」に対応して幼児期に育成すべきこと

ア) 教科等を横断する汎用的なスキル
(コンピテンシー) 等に関わるもの

① 汎用的なスキル等としては、例えば、問題解決、論理的思考、コミュニケーション、意欲など → 思考力、協同する力、心情・意欲・態度、「学びに向かう力」(集中・持続・挑戦など)。

4

②メタ認知（自己調整や内省、批判的思考等を可能にするもの）

→ **自己調整力、自覚への芽生え**

5

イ）教科等の本質に関わるもの（教科等ならではの見方・考え方など）

・ **考え方、処理や表現の方法など**

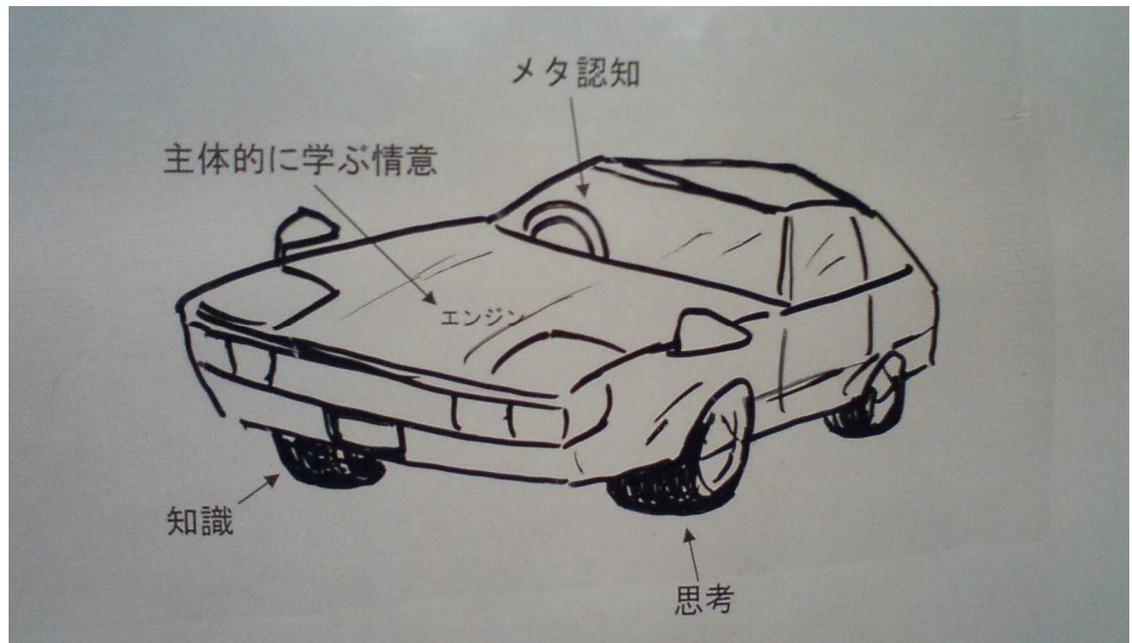
→ **内容面への気づき**

ウ）教科等に固有の知識や個別スキルに関するもの

→ **生活習慣の自立、活動に必要な生活スキル**

6

3. 資質・能力としての学力の構造イメージ



7

4. 育成すべき資質・能力の育成への提案

1) 受動的情動性：

自己肯定感と有能感を生活者そして学習者のものとして確保する。

2) 能動的情意性：

学びに向かう力（興味を持ち、集中し持続し挑戦し、粘り強く取り組む）を授業に生かす。

3) 知識ネットワーク：

個別知識を習得し、さらに中核となるアイディアを中心にネットワーク化を進める。

8

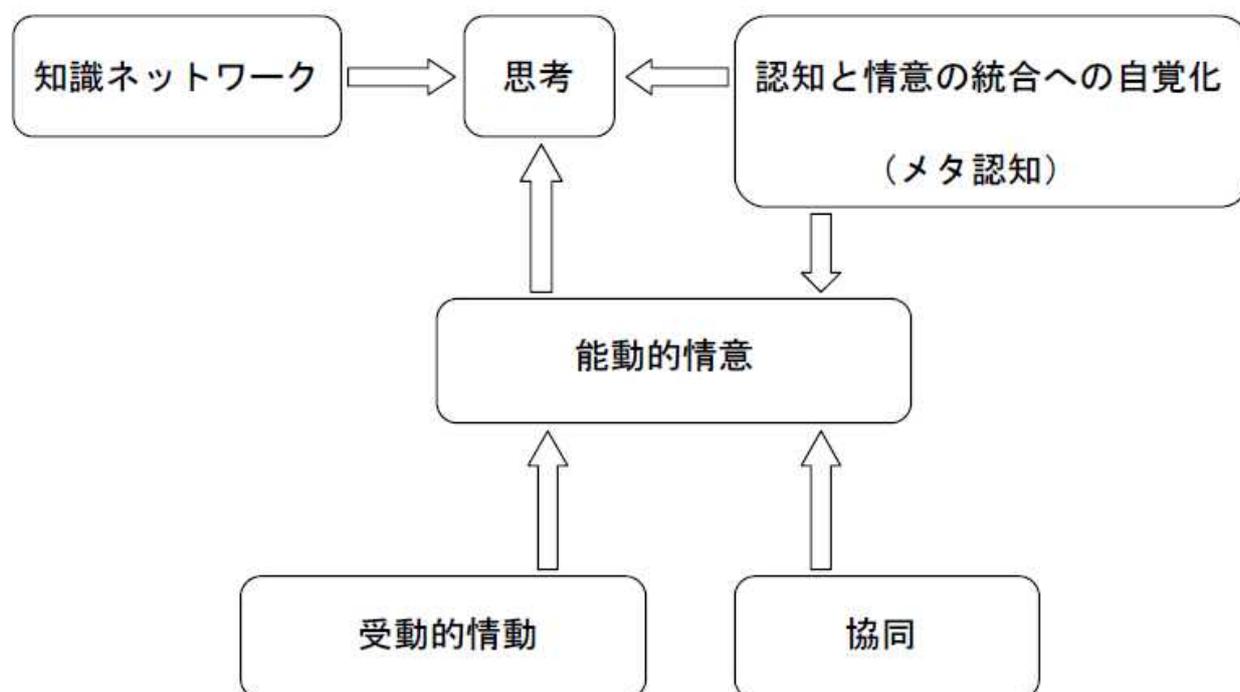
4) **思考**： いろいろな事柄への気づきを言葉に表し、理解を元に考える。

5) **自覚（メタ認知）**： 認知面と情意面を統合し、自分の活動の目的を自覚して、その判断に基づいて活動することから、授業での学習の課題を自覚して、意図的・目的・方略的に学んでいく。

6) **協同性**： 人と協力して助け合い学び合い、協同的あり方を学び、それをクラスの授業や社会的活動として実行できるようにしていく。

9

5. 育成すべき資質・能力の提案のイメージ図



10

6. 情意の育ちと教育

- **感情**は喜怒哀楽を十分に感じながらも、ほどほどに納められ、プラスの感情に転化できるようにしていく。そこにパーソナリティ（正確には気質）からの教育可能性が生まれる。
- そこから、周りの事柄に面白さを感じ、積極的に活動し、自ら進んで学び、自分が選んだ学びに持続的に取り組み、難しいことにあえて挑戦していく**姿勢**を育てる。

11

- それは一時的なやる気と言うより、**持続する願い**そして**志**であり、**意志**である。
- **意志**とは、誘惑を退け、目標を実現するために粘り強く取り組むことであり、同時に、自分の取り組みから目標を現実的にしていく営みである。

12

7. メタ認知あるいは自覚化の教育

- **自覚化のプロセスとして子ども期の学びをとらえる。**
- **自覚化とは、振り返り、気づくこと、先を見通し、計画し、意志を保持すること、今の行動・思考・感情・注意を把握し、新たな課題に対してコントロールすること、などからなる。**
- **例えば、目的を自覚し、その実現する事柄を具体的に思い描くなどはメタ認知の萌芽である。半ば外側の対象であり、半ば内側の思考だからである。**

13

- **自覚する対象の広がりがある。自分が関わるものが何かを自覚的にとらえる。自己の課題として見直し、引き受け直す。見えるところから見えないところへと想像・推測を意識的に発展させる。**

14

- **自覚の展開のための道具**を活用する。
言葉にすることはその始まりである。
- 用いる用具、表す手立て（種々の表現の仕方やその型。言語を含む）、用いる概念を広げ、用いる機会を増やす。それは認知の外化であり、対象化であり、それにより思考を促し、メタ認知を支え、拡大する手立てとなる。

15

8. 対話と足場掛けと文化への参加

- そのつながりをつけるのが「**対話的学び**」である。
- 幼児教育は**体験的な活動**として対話が起こる。学校教育の低学年などで特徴は**ミニ体験活動**により無自覚的な学びのプロセスを喚起しつつ、道具を用いて表現し、またもの・記号的表現・こと・人との対話を通して、自覚化を図るところにある。
その後、**対話過程**が主になりつつ、授業は展開する。

16

- **無自覚的な学びから対話的な学びを通り、自覚的な学びに至る。**

それは、必ずしも無自覚的学びをなくすことではなく、むしろその後も自覚的な学びを活性化し続ける。その際、その活性化を保持し、自覚的な学びに結びつける仕掛けが**対話的な学び**である。

17

- **他者との対話**は家族・友人・学校教育で展開しうる。話を同じ話題を続け、広げていくと共に、言葉を豊かにしていく。互いの考えの違いと理解につながるようになっていく。
- 対話が対象を巡り組織され、対象を豊かにしていく所に文化の意義がある。**文化財との出会いと対話**が情操を育て、感情と知性を結びつかせていく。

18